

遙かに見晴るかす雄大な絶景を眺望する伊須流岐比古山の頂、大御前、御神体に伊須流岐比古神社を祀り、神仏本持の虚空蔵菩薩、修験道と真言系密教の影響下の五社権現が、夫々に浸透、生きとし生ける悉が、和を以て尊くも即身成仏となり、命を紡ぎ継ぎ抜く天下一の聖地の寺院総名天平寺、同伝統を今に引き継ぐ、天平寺と長楽寺並びに山門の歴史的意義、次の通り。

1484 年石動山天平寺、勅願所の由緒で、歳末の数巻を朝廷に進上。1486 年石動山天平寺、歳末の巻数一合を朝廷に進上。伊須流岐比古山との関係で、諸灰燼を乗り越えんとする強い悲願と、復興実現の有難い歴史は、次の通り。

灰燼：建武 2（1335）年、建武の戦乱。南北朝戦争時、後醍醐帝の宗良皇太子、3 年滞在、南朝の経済的拠点の地。

石動山での建武の戦いにて、南朝系宗良親王側の越中国司中院定清と北朝系尊氏側の越中守護中院利清が争い、一山灰燼（「遂に定清戦場において命を墮とされ、寺院悉く兵火のために回祿せしめおわんぬ」（太平記、巻十四、諸国朝敵蜂起事の段）。

1343 年、光明天皇が、尊氏に命じ、山の再興を命ず。豊穰な広域での勸進米を許され、総名天平寺の坊院 360 余、知行地高志 7ヶ国 4300 石余、衆徒 3000 人余を擁する天下屈指の神仏習合であり、一大勸願霊場聖地として津々浦々に衆知の地となった。

◎安楽寺（長楽寺の前身寺院名）は、能州勸願所五社権現本山太平寺の別院であり、七尾城主畠山氏の祈願所として栄えた。

1518 年後柏原天皇から諸堂再建の論旨を得て、勸進米促進が活動始まる。

1543 年後奈良天皇、大御前社頭再興を論旨。

灰燼：1575 年、石動山合戦が始まる。

天正 3（1575）年、上杉謙信、能登経略のために、海路、軍を進める。

天正 5（1577）年、上杉謙信、石動山に依り、七尾城を攻略する。

天正 9（1581）年、信長、利家から能登一国を与えられ大名の仲間入り。

天正 10（1582）年、利家、鹿島半郡を長連龍に与えた。

天正 10（1582）年、越後上杉と石動衆徒が結び、前田利家と交戦。荒山城陥落時、上杉の兵火で焼失。

天正 11（1583）年、正親町天皇、秀吉に石動山再興を論旨、利家が再興に最善す。

◎天平寺管長玄秀が三社権現（観音・不動・金毘羅）に祈祷し、長家から寺領を寄進された安楽寺は、号に、長氏の号を入れ、長楽寺に改称し、再興。

天正 13（1585）年、越中東部富山に居た信長の第一武将佐々成政を討つため、秀吉、名だたる 16 戦国大名、軍勢 10 万人を率いて、成政を降伏を謀や、成政、厳冬の立山を越え、駿河の家康に、打倒秀吉での団結を誘うも失敗。僧侶姿で成政が降伏した直後、越中射水野の薬勝寺火乃宮の境内高台にて、利家に、越中を与えると宣言。

ここに、利家は、能登一国の大名から、今や、能越をも得て、全国一の大大名へと飛躍する基盤を盤石にした。

1609 年前田利家公・同夫人、石動山へ木造十一観音像を寄進。翌年利家夫人、当山大宮坊に打敷を寄進。

1630～33 年藩主利常公、幾度も、石動勸進に付、河北郡十村宛、協力周旋せよと命ず。

1753 年石動山、寺社奉行宛、勸進知識米徴収に付、往古の格式に復し、協力するよう徹底願ひでる。

1772 年後桃園天皇、石動山へ北國七ヶ国御穀神納の論旨を下す。

1757 年御室御所仁和寺、石動山へ鬼門鎮守の教示状を下す。

歴代加賀藩主の加護で、寺坊 58 となり、総称天平寺の繁栄が回復。

灰燼：明治元（1868）年、薩長藩閥明治政府が、無補償の下山命令、勸進禁止令、寺院壊滅令、僧侶還俗令で一山壊滅。

灰燼：今や、その繁栄を誇った伊須流岐比古山は、栄華を偲ばせるも、訪ねる人少なく、一人、伊須流岐比古神社が、唯々静寂なしじまに、悲哀に満ち、たたずむ。迅速円滑な歴史邸な復興が、必須である。